

先週の礼拝メッセージ(2022年3月27日) ベン牧師

「隙を与えるな」 エフェソの信徒への手紙 4:25-28

「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。」(25節)

25節が「だから」という言葉で始まるのは、今までの節を受けて、私たちはすでにイエス様であって新しくされ、イエス様と共に歩み、成長していくのだから、ということです。イエス様を信じて新しくされたら、あとは何もしなくても良いということはありません。偽りを捨て、真実を語りなさいということです。それも、隣人に対して、つまり教会の兄弟姉妹に対してです。なぜなら、私たちは教会という主の体の一部とされたからです。もし一つの体が、同じ体の一部を攻撃するなら、その体全体の命に関わることになります。(実際にそういう病気があるようです)

教会も同じなのです。教会の中でいがみあいがあるとしたら、その教会は病んでいる教会です。本来、いたわり合い、愛し合うべき兄弟姉妹、キリストの体の一部同士なのに、裁き合うなど、それはサタンの思うつぼです。私たちは隣人に対して、愛をもって真実を語るべきです。

「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでははいけません。」(26節)



聖書は怒ること自体は禁じていません。喜怒哀楽の感情は神様が人間に与えたものです。間違ったことに対して怒りを感じるのは自然でしょう。しかし、人は怒っている時、罪を犯しやすくなるというのは、皆さんも経験があるのではないのでしょうか。ですから、怒ってもそれを長引かせてはいけないと警告しているのです。悪魔につけ込む隙を与えることになってしまうからです。サタンは、私たちを信仰から離そうと、あらゆる時を用いて働きます。特に怒りはサタンにとってそれを実行する機会となってしまいます。

唯一それを免れるのは、聖霊に委ねる以外にありません。

「神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。」(ヤコブ 4:7 口語訳)

「盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。」(28節)

悔い改めという言葉がありますが、これは「悔いる」と「改める」をくっつけた言葉で、昔、日本のプロテスタントのクリスチャンたちが聖書を翻訳するときに、カソリックで使っている「懺悔」ではなく、聖書が本来語っているのは、神様の前に罪を悔い、謝り、そして今までの向きを変えて新しく出発するところまでを含むのだということで、「悔い改め」という言葉ができたのです。

ですから28節を言い換えると「盗みを働いていた者は、神と人に対して謝り、これからは向きを変えて、盗みをしない人生を歩み、働いた報酬で困っている人を助けなさい。」となります。バプテスマのヨハネの言葉を借りるなら、「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」(マタイ 3:8)ということです。この向きを変えることこそ、悪魔に隙を与えないことになるのです。そしてその歩みが、他の兄弟姉妹を助ける行動へと繋がっていきます。

信仰がいつの間にか、自分の利益のためになってしまったら、他の偶像のご利益宗教と変わりがなくなってしまうのです。

悔いていても、改めていない部分がないか、今一度探ってください。サタンはそこを突いてくるのです。そして私たちを間違った方向に導こうとします。

私たちは、イエス様が十字架の上で、ご自分の命を捨ててくださったゆえに、救われクリスチャンとされました。だから、私たちも命をかけてイエス様に従っていきましょう、というのが本来のクリスチャンの姿です。

神様の恵みと祝福があふれるばかりに注がれているから、サタンに隙を与えないで、いつもイエス様のくびきを負い、イエス様に似た者と変えられていきましょう。